

令和 6 (2024) 年度

学校推薦型選抜 (人間健康科学部 福祉学科) 試験問題

# 小論文

## 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないで下さい。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入して下さい。
- 3 解答には鉛筆かシャープペンシルを使用して下さい。
- 4 問題は全部で8ページ、解答用紙は全部で3枚あります。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 試験終了後、問題冊子も回収します。
- 7 何か伝えたいことがあるときは挙手して下さい。

## 第 1 問

以下の文章を読んで、設問 1 から設問 3 に答えなさい。

「望まない孤独」この言葉は極めて刺激的だ。

「甘い砂糖」とか「しょっぱい塩」と同じで、孤独の定義を知っている者にとっては違和感のある言葉だろう。「孤独」という言葉の定義を自ら試みている者は多くいる。心理学者、メディアやマスコミなどさまざま。自ら定義を試みる者の中には、「孤独を愛せ」や「孤独が人を強くする」といった非科学的な精神論を説く者もいる。しかし、孤独は愛するものでも、人を強くするものでもない。孤独は社会的なつながりが不足している状態であり、そこから生起される孤独感は、誰かとのつながりを求めている、身体のサインだ。愛することで乗り越えられるものでも、人を強くするものでもない。

そもそも慢性的に孤独を感じている状態に陥っている人は、何かしらの苦しみを抱えている。孤独の定義について広く用いられている Perlman と Peplau (1981) は、孤独を「不快な経験」としている。孤独とはすなわち、本人の意思に関係なく、社会的つながりの質と量が不足しているときに生じる、不快な経験なのだ。平たく言えば、頼りたいと思っても頼れない、話したいと思っても話せない、「望まない」ものと言える。しかし、さまざまな孤独の定義を試みる者がいる中で、孤独について自らひとりで耐えるものだとの「誤解」が広がらぬよう、あえて「望まない孤独」という言葉をつくった。

繰り返しになるが、自ら望んでいるのではなく、社会的なつながりが不足しているために生じるものが孤独だ。孤独と似た言葉に「孤立」があるが、これらはまったく別の概念だ。孤立の定義として最も広く用いられている Townsend (1968) の定義によれば、孤立は「家族やコミュニティとはほとんど接触がない」状態だ。当然、孤立していれば孤独を感じる可能性も高まるだろう。しかし、家族やコミュニティとの接触が頻繁にある状態でも、孤独を感じることはある。家族や友人、同僚がいても、自らの悩みについて打ち明けられなければ孤独を感じる。それは社会的つながりの量が充足していたとしても、質が不足しているからだ。

(中略)

社会的孤立状態にある人すべてが望まない孤独を抱えているということではない。社会的孤立状態にあっても孤独な人もいれば、社会的孤立状態にあってもまったく平気という人や、積極的な孤独が好きという人もいる。しかし、社会的孤立状態にある人の多くは、望まない孤独を抱えている可能性が高いという点に、注意が必要だ。この社会的孤立と孤独の関係は複雑に捉えられがちで、日本においては特にそれぞれの定義が曖昧になっている。

孤独や孤立の定義の曖昧さ、正確に言えば、積極的な孤独と望まない孤独の違いや社会的孤立の意味が社会に浸透していない状況では、問題の把握をすることは不可能だ。孤独死や孤立死の問題では、それぞれの定義が曖昧なため、社会が取り組むべきは孤独死なのか孤立死なのか、それともその両方なのか、行政や支援者たちですらわかっておらず、孤独死や孤立死に追いやられる人が何人いるのか、全国的な統計調査もできていないというのが現状である。

それだけではない。書店に行くと、多くの雑誌や書籍などで、社会的孤立と孤独の違いや、望まない孤独の存在を無視した「孤独を愛せ」「孤独が人を強くする」といった言葉が躍っている。積極的な孤独（ソリチュード）を、人間関係のストレスなどから離れる必要がある人だけを対象にして、限定的に推奨することは問題ない。しかし、誰かとのつながりを欲している人や、望まない孤独を抱えてひとりで悩み苦しんでいる人に対してまで、孤独を礼賛し推奨するのは極めて酷で危険な行為である。

（中略）

孤独がもたらす問題の一つは、既存の社会的課題の解決が困難となり、新たな社会的課題が連鎖的に発生してしまう点だ。実際に私が運営する相談窓口に寄せられたケースを例に考えてみよう。

相談者（30代前半・女性）はシングルマザーで、ひとりでの子育て（孤育て）に悩んでいた。彼女は実家が遠く、友人はいるが、友人たちも子育て中ということもあり、周りに助けを求められずひとりで育児をこなすはならなかった。さらに、毎日のように日夜を問わずパートの掛け持ちをしながら、まだ小さいお子さんの世話と家事を一生懸命頑張っていた。しかし、新型コロナウイルス流行の影響でパートはクビに。将来の不安、育児のストレスなどが積み重なり、そのストレスのはけ口を、とうとう子どもに向けてしまった。“孤育て”という社会的課題が、児童虐待という別の社会的課題を生んでしまう原因になるという事例の一つだ。

もちろん彼女だけではない。ワンオペ育児や孤育てをしている親から、「子どもを虐待してしまいそう」という相談は毎日のように寄せられる。虐待や暴力を受けている子どもからの相談もひっきりなしに寄せられる。虐待を受けながらも、先生はおろか、家族にも話せないという子どもが大勢いて、日常生活の中でだれも頼ることができず、ひとりで孤独な環境に耐えている。被虐待児が望まない孤独を抱えてだれにも頼れなかった結果として虐待死などに追い込まれたとき、孤独によってまた新たな社会的課題が発生してしまう。さらに、児童虐待で亡くなる子どもの多くは0歳児だが、これにも母親が望まない妊娠などで誰にも相談できない孤独を抱えていたケースが多々ある。このように、望まない孤独は連鎖的に社会的課題を生み続けてしまっている。

孤独がもたらす問題はほかにもある。望まない孤独を抱えたときに感じる孤独感という感情がもたらす、身体的・精神的な影響だ。人間は社会的に拒絶されると、身体的苦痛を感じたときと同じように、大脳にある背側前帯状皮質という領域が活性化されるという研究結果もある。その結果として、身体的・精神的な悪影響を及ぼす。

身体的・精神的な影響が明らかになるにつれ、望まない孤独がすでに社会的課題として捉えられているイギリスでは、孤独がもたらす経済損失も算出されている。多くの人が孤独を感じ、社会的つながりが喪失することによって生じる経済損失は、年間約320億ポンド、日本円にして年間約4.8兆円にもものぼる。

望まない孤独を感じるメカニズムはイギリス人も日本人も同じであるから、当然、日本においても社会保障費の圧迫を招いている可能性がある。しかし、望まない孤独を社会的課題として捉えていない日本では、孤独の定義が曖昧なため、孤独がもたらす経済損失は

おろか、国内で何人が望まない孤独を感じているのかということすら分からない状況だ。

経済損失などの数字によって、望まない孤独がなぜ問題なのかを可視化することは、孤独を社会的課題として捉える上で重要となり、政府や人々のこの問題に対する関心度と危機感を高めることにつながる。そして、この可視化は客観化することとも関係する。孤独という主観的な問題は、数字やデータを通じて客観化しなければならないのだ。

(中略)

孤独や孤立というと高齢者の問題だと考えがちであるが、決して高齢者だけの問題ではない。自殺の統計からは、日本ではあらゆる世代に関係する極めて深刻な問題である。特にコロナの影響を受けているにも関わらず、有効な対策がまったく講じられてこなかったことにより、命が失われ続けている世代がある。それが子どもだ。子どもの自殺は極めて深刻であり、中学・高校教師の5人に1人は生徒の自殺に、3人に1人は自殺未遂に遭遇したことがあるという調査結果もある。

ほかの世代と同じく、コロナ禍で自ら命を絶つ子どもが増えた。警察庁の調べでは、2020年の小中高生の自殺者数は前年比25.1%増の499人。これは統計開始以来、最悪の結果である。自殺者数だけでなく、私たちの相談窓口寄せられる子どもからの相談も、増加の一途をたどった。「新学期、学校に行くのがつらいです」「もう死にたいです」多くの相談は、こうした悲痛な言葉で始まる。2020年3月に相談窓口を開設して以来、2年間で20万件以上の相談が寄せられた。その約8割は29歳以下の若者・子どもたちからの相談だ。小学校低学年の子どもたちからの相談も連日寄せられていて、2020年は1日150件ほどであった相談が、2回目の緊急事態宣言が出された2021年1月以降は1日200件ほどに増加。感染が再拡大した2021年5月以降は、1日600件以上の相談が寄せられる日が続いた。

コロナ禍以前からすべての相談に対応することができないほど逼迫していた相談窓口は、さらに危機的状況に陥っている。社会の最後の砦として機能している相談窓口は、多くのボランティアによって成り立っているが、急増する相談を前に、この最後の砦を何とか死守しようと、ボランティアは睡眠時間を削り、日夜相談に応じている。

しかし、これは美談でもなんでもない。コロナ禍以前から若者や子どもの自殺問題は悪化の一途をたどっていたにもかかわらず、有効な対策が講じてこられなかった。そのしわ寄せが生じていたということになる。

このように、子どもの自殺だけが減っていないことが分かる。なぜ子どもの自殺だけが減らないのか。それは、「子どもの目線」に立った政策や支援が展開されていないからにほかならない。例えば、子どもの自殺を防ぐための相談窓口はいまだに電話相談が主体だが、現代の子どもたちは電話を使用することがほとんどない。総務省情報通信政策研究所が2021年9月に発表した「令和元年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」によると、13～19歳の1日の平均利用時間として携帯電話は3.3分、固定電話が0.4分であるのに対し、SNSは64.1分だった。友人との会話などの日常生活においても電話でなくSNSを使用する現代の子どもが、深刻な悩みを電話で、しかも見知らぬ相手に打ち明けられるだろうか。こうした現状を踏まえて、国としてもSNS・チャット相談を支援す

る動きはあるが、いまだに「子ども目線」となっているとは言い難い。子どもたちの自殺防止のための文部科学省のホームページは、2021年時点では電話相談窓口が大きく表示され、SNS・チャット相談は最下部に小さく表示されているのみだった。

相談を寄せるすべての人が孤立しているかという点、それは違う。孤立しているすべての人がひとりで苦しんでいるとは限らない。ひとり暮らしで友人や家族との関係がほとんどなくても、全然へっちゃらという人もいる。特に子どもは、家庭や学校など周りに人がいる環境のため、大人に比べると孤立しにくい。しかし、親や学校の先生、スクールカウンセラー、友人など、周りに人はいても「心配をかけてはいけない」などの理由で相談しない、頼れないという状況も起きている。悩みを抱えている人が、社会的孤立をしているという前提で支援を組み立ててしまうと、子どもたちのように社会的には孤立していないが、孤独を抱え苦しんでいる人は支援の対象には入りづらくなる。孤独の問題は、その人個人の問題から、社会的課題へと広げる必要があるのだ。

出典：大空幸星（2022）「望まない孤独」扶桑社新書

設問1 なぜ「望まない孤独」に対応しなければならないのか、作者の意図に基づきながら200字以内で説明しなさい。

設問2 子どもの孤独や自殺問題を「子ども目線」で解決していくには、作者はどのような方法が有効だと考えているのか、200字以内で説明しなさい。

設問3 孤独や孤立の問題に対して、あなたはどのような対策が必要だと考えるか。500字以内で説明しなさい。

## 第 2 問

以下の図 1～5 は生活と支え合いに関する調査結果について示したものである。これらを参照しながら以下の問いに答えなさい。

設問 1 図 1 及び図 2 は、日常生活で頼れる人について調査した結果を示したものである。

図 1・2 の結果を関連させたうえで、近年の日常生活で頼れる人の特徴や傾向について 150 字以内で説明しなさい。

※調査対象者は、18 歳以上の世帯員である。

※図 2 は複数回答可能な調査の結果である。

図 1 頼れる人の有無別 個人の割合 (%)

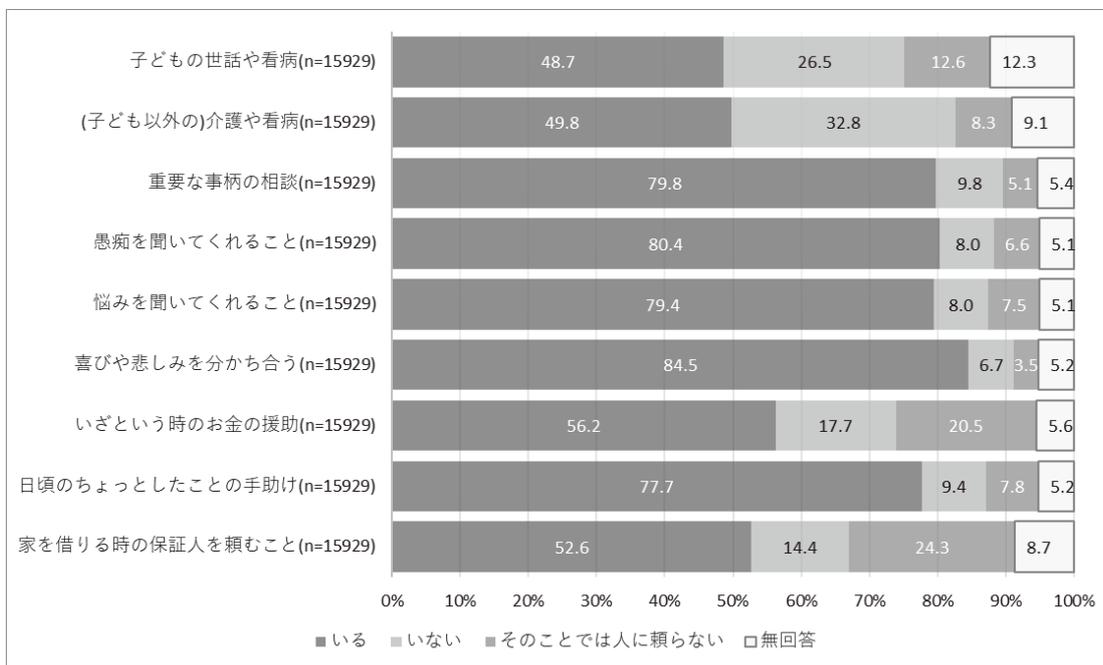
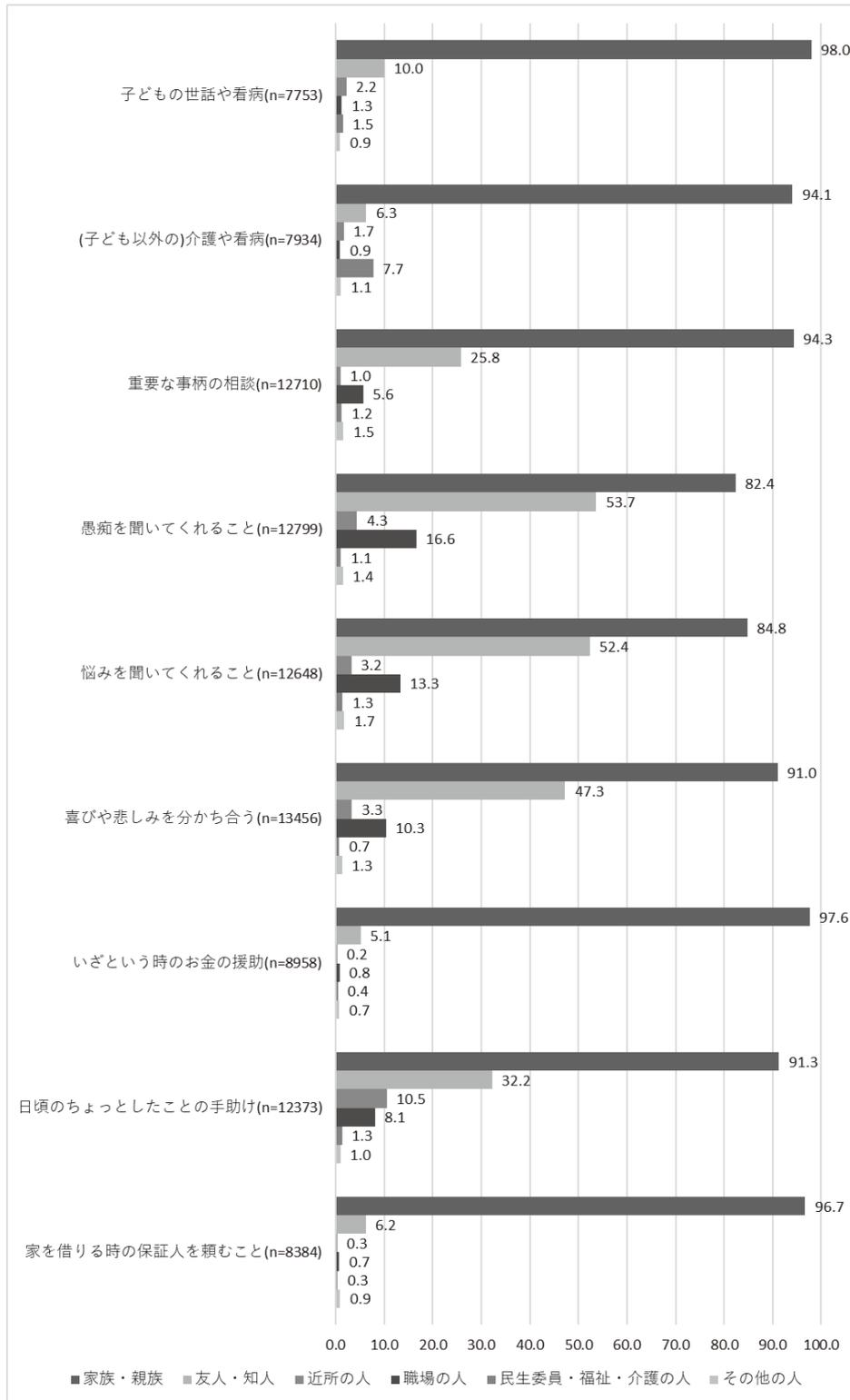


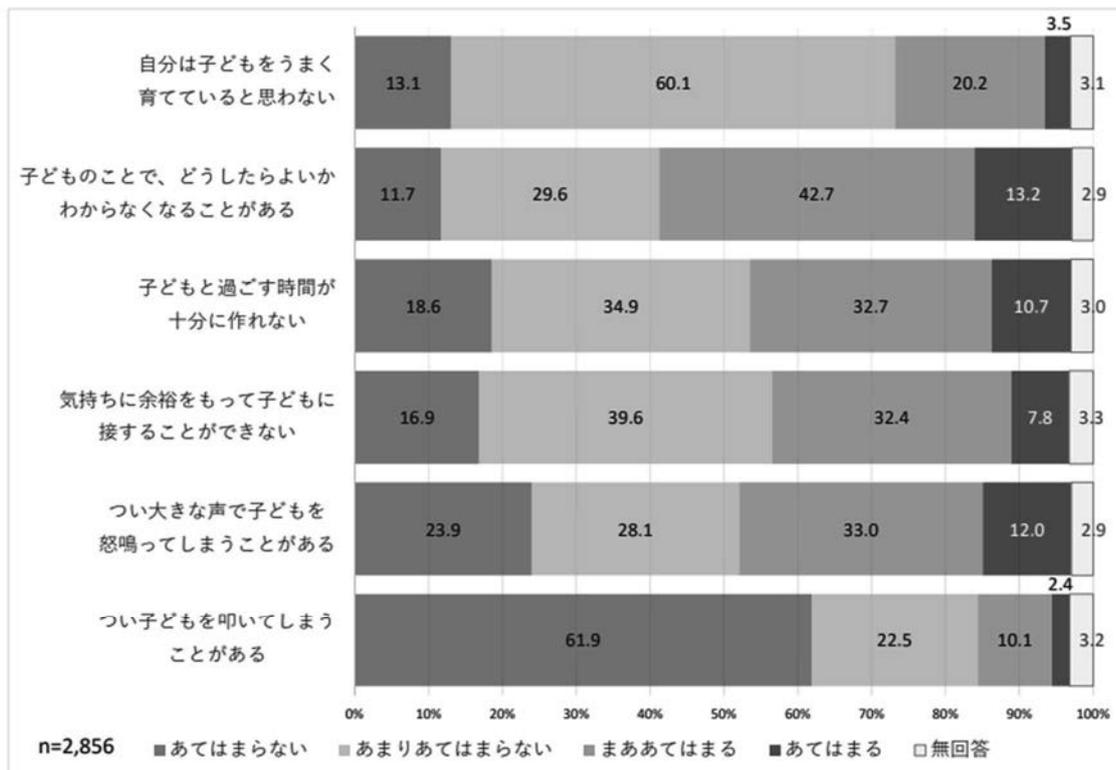
図2 頼れる相手別 個人の割合(%) (複数回答)



設問 2 図 3 は、子育てへの主観的評価に対する結果を示したものである。設問 1 の特徴や傾向を踏まえ、子育てに対する課題の軽減・解決に必要なと思われることについて、あなたの考えを 200 字以内で述べなさい。

※調査対象者は、18 歳未満の子どもがいる者である。

図 3 18 歳未満の子どものいる者の子育てへの主観的評価 (%)



設問3 図4及び図5は地域の人との繋がりについて調査した結果を示したものである。

図4・5の10歳代と80歳代以上の結果を比較して、その特徴や傾向を150字以内で述べなさい。

※図4は「生活上の困難を解決するために、地域の人々はお互いに協力すべきである」という質問の回答結果である。

※図5は「あなたが現在お住まいのご近所には、日常生活において手助けや支援を必要とする人がいらっしゃるかどうか」という質問の回答結果である。

※調査対象者は、18歳以上の世帯員である。

図4 年齢階級別生活上の困難の解決方法についての考え方（地域の人々はお互いに協力すべき）別 個人の割合（%）

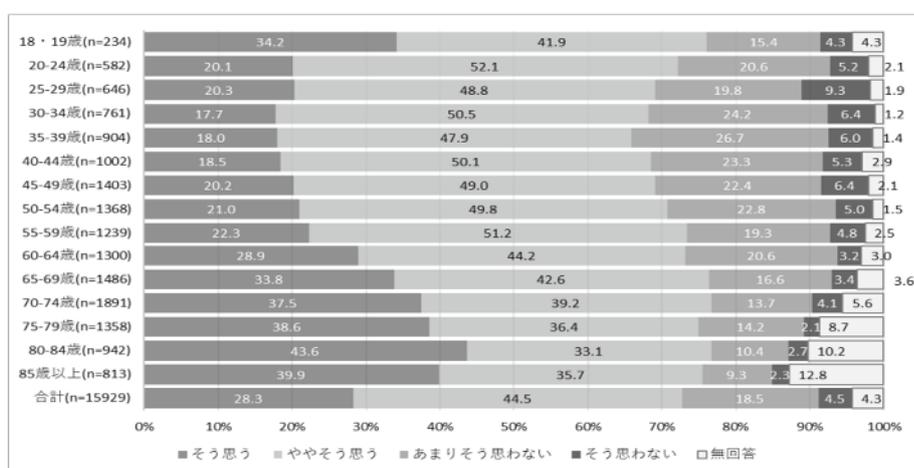
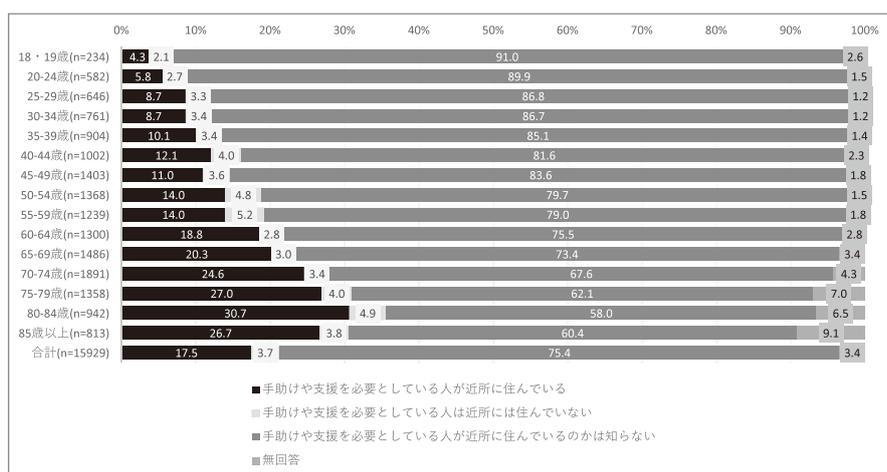


図5 近所に手助けや支援を必要とする人の認知（年齢階級別：%）



設問4 図1～5の結果を踏まえ、あなた自身が大学生生活で取り組みたいことについて300字以内で述べなさい。

出典：図はすべて、「2022年 生活と支え合い調査」（国立社会保障・人口問題研究所）（URL:<https://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2022/SSPL2022.html>）を加工して作成